



まる ○福連携2023

一般社団法人福祉システム北海道

高橋 銀司代表理事

異業種との対話から福祉を探る

◆エピソード7(終) ゴスペルピアニスト・ゴスペルディレクター 大山 小夜子さん



おおやま・さよこ 4歳からピアノとオルガン、6歳から教会で奏楽を始め、米国留学時にピアノやパーカッションで数々の賞を獲得。1998年から本格的なゴスペルピアノを弾きながら多くのクワイア(聖歌隊)を指導し国内外で活躍。音楽を通してゴスペルの魅力を多くの人に伝えている。

したり、虚栄心や、見栄などがある場合は、たいてい失敗します。ゴスペルをゴスペルとしてお伝えできなかったり、自己中心の態度や発言から多くの人を傷つけたり、ゴスペルを歌うことを嫌いにさせたりといろいろな失敗をしてきました。

●ゴスペルピアニスト、ゴスペルディレクターのお仕事について、教えてください。

ゴスペルの指導のほか、企画やさまざまな観点からゴスペルに関わる仕事がゴスペルディレクターです。ジャズピアニストという言葉があるようにゴスペルに特化したピアニストがゴスペルピアニストと呼ばれています。

●いろいろなジャンルの音楽の中で、ゴスペルを選んだ理由はなんですか？

元々いろいろな音楽に触れていましたが、25年前に初めてゴスペルのワークショップのお手伝いをしたときに、それまでのどの音楽とも違うゴスペルに衝撃を受けたことが理由です。演奏スタイルが自分にあったことを今でも覚えています。

●どんな曲に衝撃を受けたのですか？

曲ではなくゴスペルそのものに衝撃を受けました。音楽はもちろんのこと、自分自身がクリスチャンなので、聖書が土台となっている歌詞に共感したり、曲に癒されたりしました。

日本では「天使にラブソングを」などの影響からゴスペルといえば大勢で集まって歌う、というイメージをお持ちの方が多くいます。ゴスペルは歌詞が聖書に基づいていけば、ロックやカントリー、ジャズといったジャンルやスタイルが存在しますし、大勢ではなくゴスペルシンガーが1人で歌う場合もあります。

私がゴスペルに感動した理由のもう1つは「与えられた自分の声を生かしている」ところでした。一般的に女声がソプラノ、アルト、男声がテナー、ベースと分かれますが、私自身は地声が低く音域的にはテナーでした。学校でもテナーの音域を歌うと男声だとからかわれたので、歌うのがすごく嫌いになったんです。でもゴスペルはカテゴライズされた中に自分の声を当てはめるのではなく、その人の声を生かす、ということを知って解放されました。

日本でも有名なアメイジング・グレイスは、透き通った声で歌われているバージョンがよく知られているんですが、それだけではないんです。本国米国のゴスペルだと、女性でもベースを歌ったり、男性でもソプラノを歌ったりします。

●ゴスペルで大切にしていることはなんですか？

ゴスペルをゴスペルとしてシェアすること、ですね。ゴスペルは「God-spell~神の言葉」が語源になっています。日本ではブラックミュージックとして、歌詞に関係なく、ゴスペル風に歌うものもゴスペルと呼ばれています。クリスチャンでなくてもゴスペルを歌ってかまわないと私は思っていますが、元々ゴスペルは聖書の内容を歌い神を賛美する音楽でした。私はそれを大切にしていますし、何をどこに向かって歌っているのかを大事にしています。

●キャリアも長い大山さんですが、失敗はありますか？

たくさんあります。自分自身だけでやろうと

●それをどう乗り越えてきましたか？

自分の弱さを誇る。自分をよく見せようとしないうこと。自分の弱さを認め、できないことはできないと言うこと。そうすることによって多くの「助け手」が与えられたように思います。そのことをゴスペルの歌詞を通して教えられたことが何度もありました。失敗は決して無駄ではないと思います。福祉や介護の方たちも、失敗を恐れずにそこから多くのことを学んでほしいと思います。

●ゴスペルの仕事をしていて、福祉や介護を感じることはありますか？

実はあまりないです。母が特養に入っていたので、そういった私生活の方が福祉や介護などを感じることは多いです。ゴスペルでは盲導犬を伴って練習に参加される視覚障害者の方がいたり、車いすの方もいらっしゃいますが、誰もが同じと考えています。でも、工夫はしています。例えば、身ぶりなどで手を使う時に「こんなふうに」と手ぶりで説明するところを、言葉を使って

「ふくらませるように」などと説明しています。平等という言葉を使うとおこがましいですが、一人ひとりに向かい合うことはすごく大事なことです。「一人ひとりと向き合う」という意味では、ゴスペルでも介護でも、同じなのだと思います。

●機能訓練で生かせるようなレクチャーはありますか？

声を出すことは身体機能を高め、コミュニケーションも取ることができます。ゴスペルは歌うだけではなく、手をたたいたり、足踏みすることで表現することもあります。聖書に「私たちが賛美しなくても、岩が賛美する」という言葉があるように、歌えなくても、手をたたいたり身体をゆすったり、立ち上がるだけでもいいと思います。

また、声のキャッチボールもいいです。「ここに向かって声をください。ほ！」と言って声を出してもらおう。「今、声が手前に落ちてしまいましたね。ここにください。あ、今度は受け取りました」と受け取る動作をします。言葉じゃなくても、「ほ！」でも、「はい！」でも、なんでもいいんです。対象をはっきりさせて「ここに声をください」と言うと、意外と声が出るのです。訓練する人が場所を移動して「今度はここに声をください」と言って身体を動かすことも促したら、声以外の訓練にもなるんじゃないかなと思います。

●音楽はどのようなジャンルから影響を受けましたか？

音楽の先生でありクリスチャンだった母からはクラシックや讃美歌を、父からは映画音楽やラテンやジャズを聴くきっかけをもらいました。そしてロックやジャズやポップスなどを経て、ゴスペルに辿(たど)り着きました。他の人とハマって歌うのも教会などでしていましたし、初めて人前でオルガンを弾いたのも教会です。ゴスペルは音楽の原点と言われますが、私自身も原点に戻ってきた気がします。(おわり)



◎インタビュー◎

たかはし・ぎんじ 1987年、小清水町出身。北海道介護福祉学校や北海道医療大卒業後、障害福祉事業所に勤務の傍ら、北星学園大大学院社会福祉学専攻修士課程修了。オホーツク社会福祉専門学校専任教員を経て、現在、日本医療大総合福祉学部助教およびEzo'n music提携ジャーナリスト(NPO経営・福祉系)としても活動。社会福祉士、介護福祉士。

日本医療大 Ezo'n music



「○(まる)福連携プラス」YouTube配信中

インタビューの様子などを視聴できる動画チャンネル「○(まる)福連携プラス」がYouTubeで配信中。紙面に掲載し切れない内容を含め10分ほどにまとめている。

○福連携プラス

